

船守弥三郎殿許御書

弘長元年六月二七日 四〇歳

わざと使^者ひを以て、ちまき・さけ・ほしひ・さんせう・かみしなじな給^{おわ}ひ候^あひ畢^あんぬ。
又つかひ申^者され候は、御かくさせ給へと申し上げ候へと、日蓮心得申すべく候。

日蓮去ぬる五月十二日流罪の時、その津^着につきて候ひしに、いまだ名をもきゝをよび
まいらせず候ところに、船よりあがりくるしみ候ひきところに、ねんごろにあたらせ給
ひ候ひし事はいかなる宿^{しゆくじゅう}習^{じゅう}なるらん。過去に法華經の行者にてわたらせ給へるが、今
末法にふなもりの弥三郎と生まれかはりて日蓮をあわれみ給^怒ふか。たとひ男はさもある
べきに、女房の身として食をあたへ、洗^{せんぞく}足^手てうづ其の外さも事ねんごろなる事、日蓮は
しらず不思議とも申すばかりなし。ことに三十日あまりありて内心に法華經を信じ、日
蓮を供養し給ふ事いかなる事のよしなるや。かゝる地頭・万民、日蓮をにくみねたむ事
鎌倉よりもすぎたり。見るものは目をひき、きく人はあだむ。ことに五月^{さつき}のころなれば
米もとぼしかるらん、日蓮を内々にてはぐくみ給ひしことは、日蓮が父母の伊豆の伊
東^{川奈}かわなと云ふところに生まれかはり給^育ふか。法華經の第四に云はく「及び清^ふ信^も士女
を遣^{つか}はして法師を供養せしめ」云云。法華經を行ぜん者をば、諸天善神等、或はを^男とこ
となり、或は女となり、形をかへ、さまざまに供養してたすくべしと云ふ經文なり。弥
三郎殿夫婦^{しによ}の士女と生まれて、日蓮法師を供養する事疑ひなし。さきにまいらせし文に
つぶさにかきて候ひし間、今はく^委はしからず。

ことに当地頭の病悩^請について、祈せい申すべきよし仰せ候ひし間、案にあつかひて候。
然れども一分信仰の心を日蓮に出だし給へば、法華經へそせうとこそおもひ候へ。此の
時^{じゅうら}は十羅刹女もいかでか力をあはせ給はざるべきと思ひ候ひて、法華經・釈迦・多宝
・十方の諸仏並びに天照・八幡・大小の神じんぎ等に申して候。定めて評議ありてぞしるし
をばあらはし給はん、よも日蓮をば捨てさせ給はじ。いたきとかゆきとの如く、あてが
はせ給はんとおもひ候ひしに、ついに病悩^治なをり、海中^鱗いろくずの中より出現の仏体を
日蓮にたまはる事、此の病悩のゆへなり。さだめて十羅刹女のせめなり。此の功德も夫
婦二人の功德となるべし。

我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしが、法華經の行者となりて無始色心本
是^{ぜりしやう}理^{みょうきやう}性^{みやう}・妙^{ちんごう}境^{ふめつ}・妙^異智^い金剛不滅の仏身とならん事、あにかの仏にかはるべきや。過去久
遠^{じんでん}五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。法華經の一念三千の
法門、常住此説法のふるまひなり。かゝるたうとき法華經と釈尊にてを^{てんどう}はせども凡夫は
しる事なし。寿命品に云はく「顛倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむ」とはこ
れなり。迷悟^{めいご}の不同は沙羅の四見^{しやら}の如し。一念三千の仏と申すは法界の成仏と云ふ事に
て候ぞ。雪山童子のまへにきたりし鬼神^{たいしゃく}は帝釈^{へんさ}の^し変作^しなり。尸毘王^{しびおう}の所へにげ入りし
鳩^{びしゅかつ}は毘首羯摩^{てん}天ぞかし。班足王^{はんぞく}の城へ入りし普明王^{ふみやう}は教主釈尊にてまします。肉眼^{にくげん}は

しらず、仏眼は此をみる。虚空と大海とは魚鳥の飛行するあとあり。此等は經文にみえたり。木像即金色なり、金色即木像なり。あぬるだが金はうさぎとなり死人となる。釈摩男がたなごころにはいさごも金となる。此等は思議すべからず。凡夫即仏なり、仏即凡夫なり、一念三千我実成仏これなり。

しからば夫婦二人は教主大覺世尊の生まれかわり給ひて日蓮をたすけ給ふか。伊東とかわなのみちのほどはちかく候へども心はとをし。後のためにふみをまいらせ候ぞ。人にかたらずして心得させ給へ。すこしも人しるならば御ためあしかりぬべし。むねのうちにをきてかたり給ふ事なかれ。あなかしこあなかしこ。南無妙法蓮華經。

弘長元年六月廿七日

日蓮花押

船守弥三郎殿許へ之を遣はす